

佐竹やふろう

動物図鑑 2

カメ

カメが言うのもなんだけど、獣医というのは大変らしい。学校では犬と猫しか触らせてもらえないのに、実際の仕事となると、人間と家畜以外のあらゆる動物が持ち込まれてくる。なかには犬猫とはかけ離れたものも……そう、たとえば私です。

だってなんだか腹の中がごろごろして食欲がなくなったんだもん……それというのも飼い主の旦那が変なものを私に食べさせるからだ。ハウレンソウの葉。固いバナナ。カマンベール・チーズ……ありえないですか普通？カメにチーズやりますか？

まあ常識なんて最初っから期待薄の旦那だから、ホームセンターで普通にカメ用の配合飼料買ってこいとは言わないが、せめてカメらしい食事をさせてもらえないでしょうかと願ってもそれはせんない望み……

それに、あの旦那が次から次へと変なものを見つけてきては私に食べさせようとするのには十分なわけがあったのだ。すべての始まりは、一枚の新聞折り込み広告だった。

次々とお金が舞い込むキセキのサイフ新発売！

鶴は千年亀は万年と言われ、長寿のシンボルとされてきた亀……

その体内から取り出された貴重な亀石をあしらった特製のサイフだから……お金を呼ぶ、ツキを呼ぶ！まさにキセキ！お金が二倍、三倍と戻ってくる！

全国で大反響！不思議体験続出！金運大好転が起こり始める！！

中国夏王朝から脈々と続く幻の亀石の幽玄パワー！！

純白に輝く亀石の絶大なる効果！！不思議なる神秘パワー全開！！

キセキの亀石パワー！！

神秘の亀石パワー、その秘密とは？

そもそも亀石とは中国湖西省にだけ生息するといわれる青亀の体内で分泌される貴重な体内石のこと……

その美しい結晶の形は古くから「陸の真珠」とも呼ばれ、上品で深みのある色合いは「池の象牙」とも呼ばれてきました……

夏王朝の昔より、杜甫、李白などの著名な詩人たちがその美しさを愛で、詩にしてきた亀石……

今回、その中でも特に美しい特級ランクの亀石をふんだんにあしらいました！！

中国四千年の歴史を受け継ぐ史実を再現！！

超豪邸、別荘はもちろん、リムジン、クルーザー、自家用ジェット・ヘリからダイヤに金塊まで、欲しいものがなんでも手に入れられる！

効果に自信アリ！だから……90日間何の効果も感じられない場合には、商品代金を全額お返し！さあ、安心して早く身につけて下さい！！

注文殺到！！電話回線パンク寸前のため10回線増設！

全国から感動の体験談が続々！！

- ・ 亀石の財布で築いた驚異のサクセスストーリー 東京都 沢野和文さん（40歳）
- ・ ついにマイホームを手に入れました！ 愛知県 小村龍二さん（45歳）
- ・ 山道で百万円を拾いました 福井県 西山修一さん（29歳）

- ・膨大な退職金が入りました！ 群馬県 栗橋トモエさん（52歳）
- ・お医者さんと結婚！まるで映画の様な展開でした！！ 福井県 飯倉楓さん（28歳）
- ・いつの間にかお金が増えました！ 沖縄県 島袋菜緒美さん（24歳）
- ・ギャンブルが絶好調！ 山形県 加瀬民男さん（32歳）
- ・サイパンで、素晴らしい幸運を体験！ 大分県 八島久美子さん（37歳）
- ・初めての株で大もうけ 石川県 吉村純子さん（52歳）
- ・難しい地上げに成功しました！ 大阪府 井原龍蔵さん（33歳）
- ・ネットの小説が十万部売れました 埼玉県 佐竹やふろうさん（45歳）

これを見てまず奥さんが顔色を変えた。

「あなた、これ見てよ！」

「ほうほう……これはすごい！」

「カメの石って宝石なのね……」

「意外と高く売れるのかもな。いくらぐらいだろう？」

雑貨屋を営む旦那は広告を舐めるように見まわした。

「金と同じぐらいするのかもな……三千元ぐらいかな？」

「たった三千元？」

「ちがうよ、一グラム三千元だよ」

そして旦那は夢見るような目をして、「一グラムは一円玉の重さだよな。十円玉は、確か4.5グラムだ。すると、三千かける4.5で……」

「一万三千五百円よ！」

「一万三千五百円か！」

それから夫婦は揃って私の方を向いたが、目つきがさっきとは違っていた。なんというか、旦那の方は腹の中にまで突き通るような、厳しく見定めるような目つきだったし、奥さんの方は、旦那よりもはるかにはるか遠く、夢の彼方を見ているような、そんな不思議な目をしていて。

「でも、どうやってその石を取り出すんだろう？ドライバーでこじ開けるわけにもいかないし」

「獣医さんに頼むんじゃない？」

「うむ。しかし、石が出たとして、どこで買ってくれるかな……駅前の漢方の店に聞いてみるか」

「別に売らなくてもいいと思うの」と奥さん。「私、お守りの袋に入れて、ずっと肌身離さず持っていたいわ！」

その日から私の餌が変わった。旦那は過去に尿管結石を患ったことがあり、そのときに医者から絶対食べてはいけないと言われたものを、せっせと買ってきては私に食べさせた。それがあの、ハウレンソウの葉、固いバナナ、カマンベール・チーズである。

来る日も来る日も同じ餌、ハウレンソウの葉、固いバナナ、カマンベール・チーズ……うまくはないが、腹が空けば食べずにはいられない。しかしうまくないものを食べさせられるのは結構なストレスだ……もう少し、他の食べ物と混ぜるとか、気を利かせてはくれないものだろうか……食事のあと、私は必ず水槽の底に潜り、そこに撒かれた黒い砂利を食んでは吐きだし、食んでは吐きだしした、すこしでもあのまずい餌の後味を薄めるために……

そして、ある日とうとう食べられなくなった。そんな私の様子を夫婦は水槽の上から興味津々の様子で眺めた。

「石か？」

「石よ！」

私もなんだか腹の中がごろごろして、石がたくさんあるような気がした。腹が空き、食べたいのに食べられない、その感じは苦しかったけど、でも旅行先の泥沼から私を拾い上げて以来、長年私を水槽で育ててくれた夫婦に、こんな形で恩返しができるかと思うと私は嬉しかった……恩返しをするのは鶴ばかりじゃない、カメだって長生きするばかりが取り柄じゃないってことを世間の生き物たちに対して示したかった……

それで、獣医である。

近所に店を開いていたこの獣医は実は大変な名医だったのだ。獣医はまず動物にガス麻酔をかけるための器具の発明者として知られていた。私はさっそくレントゲンを撮られ、石のような粒々が確かに体内に溜まっていることが確認されると、獣医発明によるプラスチックでできた透明な容器（動物の体に合わせて三種類の大きさがある）に入れられた。容器の内部は白いプラスチックの仕切り板によって上下に分けられている。その仕切り板には穴が開いていた。私はこの仕切り板に乗せられたのだったが、容器の板より下の部分には透明なチューブがつながっていた。チューブの先は、また別の装置につながっている……

その別の装置の金属のコックを獣医がひねった。やがて色も臭いもしないガスが透明なチューブを流れ、仕切り板の穴から吹き出てくるはずだった。

私は待った……ガスの気配を感じたような気がした。私は二三度、無意識に手の爪で宙を掻き、そしてすぐにその動きがスローモーションのようにのろくなっていくのを感じた。やがて力が抜けてきて、甲羅から出ている部分、手と、足と、頭、それに細いしっぽも、まるで自分のものではないみたいに重力に逆らう力を失くしてぐったりと床につき、動かなくなった。

体が動かなくなり、耳が遠くなってきても、意識と目だけはまだ起きていた。そして最後に意識がなくなるまでの間——それはきっとほんの一瞬のことだったんだらうけれど——私はこのわずかの時間の間に、それまで考えたこともなかった、いろんなことを考えた気がするのだ……

母親の顔も知らず、沼のほとりの土の中に卵として産み落とされたっきり、たった一人で生きてきた……幼い頃に夫婦に拾われて、それからあの店の奥に置かれた水槽が私の世界のすべてだった。だから、私はあの夫婦の苦労を誰よりもよく知っている。なにしろずっとそこで見てきたから。子供向けのおもちゃとか、台所用品を使った主婦向けの裏技とか、なにかの流行があるたびに客足は増えるが、いつもは客もまばら。それに去年のあの駅に近い場所にオープンした百円ショップ以来、夫婦はずっとうかない顔をしている。旦那の方はもう店を閉めたがっていた。奥さんが何とか旦那をなだめつつ、毎月のやりくりをするのを私はそばからずっと見てきたのだ。

餌をくれるのはいつも奥さんだった……奥さんはいつも私に餌をくれながら、話をしてくれた。その内容は、ほとんどがぼやきのようなものだったけど、最後はいつもあきらめの言葉で締めくくられる。どうもうまいかないわねえ……どうしてかしらねえ……悪いことばかり続けるのよねえ、でもじっと我慢して続けていれば、いつかはいいこともきっとあるわよねえ……べつに贅沢したいわけじゃないけど、これじゃあまりにもみじめだし……でもほかになにかアテがあるわけじゃないし、やっぱりどうにもしかたがないわねえ……

そのやりくりを私が助けられるとしたら！今まではただ水槽の中でぼんやり夫婦の奮闘を眺めてきただけの私が、実は夫婦にとっての青い鳥だったとしたら！ああ！もしそうだとしたら私は今ここで、体を割かれて死んでもいい！石はどれくらい溜まっただろう？十円玉二枚？五枚？ひょとして十枚ぐらい？それで奥さんのうかない顔も、数週間は晴れるだろうか……

ああ！思えば私はいままで死のことを真剣に考えたことはなかった、漫然と日々を送るだけで心の内から信仰を呼びかける声もずっと聞き流してきたのだ。今こそ私は伝説の、いや、すべてのカメの心に生まれながらに刻み込まれている、あのカメの天国への思い、果てはないけど有限で、常に水が絶えることのない深くない泥沼と、無数の心地よい穴が複雑に穿たれた溶岩質の岩、ブラックバスなどの荒くれ者も、神意に反して空を飛ぶあのいやらしい悪魔の化身の鳥たちもないカメの天国への熱い思いの前に、腹甲をついて頭をたれるときではないのだろうか？ああ、今こそ私はカメの天国を切望するべきなんじゃないだろうか！どうだろうか！そしてそのカメの国の中心に鎮座するのが、どこかカメに似た面影を持つ奥さんの、あの憂いに満ちたあきらめ顔であることを私は願った……

ああ、しかしカメの天国は、それは一体どこにあるのだろうか……本当にそれはあるのだろうか？……それに、私はそこに入れてもらえるのだろうか……

「あら、泣いてるわ」と奥さんが言った。

「単なる反射的な反応でしょう」と獣医はにこやかに笑いながら乾いた張りのある声で言った。

「海がめが産卵時に泣くというのも、実は塩を含んだ粘液を出しているだけなんですよねえ」

医者はそんなことを言いながらも、目ではじっと動かなくなった私と時計をすばしっこく見比べつつ、時が来るのを待っていた。

やがて物音がすっかり途絶えても、私の目だけはまだ起きていた。獣医が最後に時計に目をやり、それからにゅっと腕が伸びてきて私の上にある容器の蓋をとった。そして獣医は私の甲羅をひょいと掴むと、まな板のような手術台の上に私を置いた……

今、私は雑貨店の奥の壁ぎわにある水槽から、レジの方を眺めている……

あいかわらず客の姿はまばらで、旦那の顔色は冴えない。

……あれから二週間たつ。あのときは、体がばらばらになったみたいで、二度と元の姿に戻れるなんて信じられなかった……

でも一週間で、元の体に戻った。

ときどき、自分で自分の生命力が嫌になる……

今でも、手足のつけ根が無性に痒くなるときがあるけど、それもだんだん稀になってきた。このまま痛みも痒みも消え去って、やがては手術のことも忘れてしまうのだろう……

麻酔が切れてくると、私は痛みのために目を覚まし、またその同じ痛みのために意識を失くした……私はそれを、何度繰り返したのか、分からない……両手両足のつけ根を火箸で焼かれるようなあの痛み……あまりの痛みには私はもだえ、引きつり、もがき、鼻からシュッと音を出した。するとあの獣医は私の腹がへったのかと勘違いして、皿に入れた死んだ魚を持ってきやがった。へっ！死んだ魚！私はそのとき獣医に対して本当に腹が立ったけど、今思えば、死なずに戻ってこれただけでも、あのいけ好かない獣医には感謝すべきなんだろう……

家に帰ると私はいつもの水槽にもどされた。それは綺麗に洗って新しい水が入っていたけど、でもいつもの水槽だった。何が起きたのだろうか？私の中の石はどうなったんだろう？私は知りたかったけど、旦那はすっかり私に関心を失っている様子だったし、奥さんの姿は見えなかった。私は待つしかなかった……

夜になって、ようやく奥さんが戻ってきた。奥さんはポケットからお守りの袋を取り出すと、私に見せた。そして、その口をあけて中身を左手の手のひらに空けるような動作をした。すると中から黒い角の取れた小石が転がり出た。全部で十粒ぐらいだろうか。奥さんが言った。

「あなたのお腹の中にあつた石よ。全部で五十ぐらいあつたわ……白くはなかったけど、というか、これ水槽の底に敷いている砂利の石だけど、でも私はありがたくいただいたの。砂利の石でもおまえの中から出てきたのだから亀石は亀石よね……それで、私、こうしてお守りの中に入れてるの。別にお金持ちになって、マイホームとかリムジンとか、贅沢したいってわけじゃないけど、キセキって名前だけでも縁起がいいじゃない……だから私のタンスの引き出しと、トイレと、台所と、仏壇と、それと店のトラックのバックミラーにぶら下げてあるのと、あと私の枕の中のと……全部のお守りに少しずつ分けて、こうやって入れてるのよ。だって、主人が言うみたいに捨てるわけにもいかないし、どうにもしかたがないじゃない……」

私は水槽の底で泣いた。いや、塩分のある粘液を流した。そして、奥さんの顔はやはりどこかカメに似て美しいと思った。

私はその顔に見とれていたが、そのとき突然分かったのだ。いま、ここがそうなのだ……その発見は雷のように私の脳を貫いた。法悦のけいれんが私の体を襲い、私は嵐にゆすぶられる海綿のように揺れた……

しだいに白濁していく水を通して奥さんの顔がオパール色の暈にあやどられ、輝きだした。淡く、妖しく輝くその憂いに満ちたあきらめ顔に恍惚として見とれながら、私は悦びにむせび泣いた。